



今月の江戸しぐさ「結界わきまえ」 六

「結界」とは、例えば落語家が始めに膝の前に扇子を置くことで、演者と客とを区切り、自らの立場を認識する儀式にたとえられます。

人は社会的な動物ですが、それぞれの個をもっているのもので適度な距離感と緊張感をもって接することによって心地よい関係を築くことができます。

(結界は状況によって変わりもします)

- ①結界をわきまえなくて、人に接すると「そんな間柄じゃないよ」や「そこまで言うか」等不快や不安、怒りの感情を惹起します。
- ②また、江戸時代は欄間を作る専門の職人がいたように職業が非常に細分化し技能が高度化していました。(職能の細分化は世界一であったといわれます) よって専門(結界)以外のことを知ったかぶりしたり口をだすことは「結界わきまえ」と言われて非難されました。
- ③また「結界わきまえ」は「己をわきまえる」ことに通じています。己の分以上の虚栄心や、それに基づく、嘘やごまかしをする人は軽蔑されました。

職場では、患者の結界をおかしてはいないか? 他の職能を尊重し、知ったかぶりをするのではないか? 見栄によって嘘やごまかしをするようなことがないかを考えてみてください。

「結界わきまえ」をおまじないにすると、見栄がなくなり、人間関係とともに気持ちのよい人生になるかもしれません。どうぞご活用を。



サムライ

※江戸思草は、江戸時代の町民が良いとされること、悪いとされることなどの生活の規範としていたものです。

6歳までに躰とともに習得すべき事とされていました。

判断の基準は粋かどうかだったようです。

他の国にない、一般庶民の高度な精神性が、当時日本に来た外国人に驚きをあたえていたことが多数記録されています。

ロバート フレデリック ブラム

Robert Frederick Blum

(1857~1903)

日本をこよなく愛したアメリカ人画家。

江戸の風情が強く残っていた明治中期に

約2年半訪れ、当時の息づかいさえ感じる作品を

残してくれました。

